

平成26年度

中学 一般 第1回

国 語

注意：問題用紙が配られても、指示があるまではページを開かないで、下の説明を読んでいてください。

係の先生の指示によって、次の順に試験をおこないます。

1. 問題および解答用紙の枚数を確認します。
不足や乱れがあったら申し出てください。
2. 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
3. チャイムの合図で開始します。
解答はすべて解答用紙に記入してください。

終わりのチャイムになったら筆記具を置いてください。

係の先生が解答用紙と問題用紙を集めます。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

人間は、もちろん、物質的な、ある基本がみだされていなければ、飢えや凍えのもとでは、豊かだとはいえない。^アしかし、豊富^{注1}とか豊饒^{じょう}という言葉は、セイタイ学者が言うように、もともと生物にとつて、地球的な豊かさ、つまり、なるべく多くの種^アが共存していること、を意味していた。多くの種が共存しているほど、それぞれの個体もまた、豊かな生き方を保障されているのが、大自然の原理原則だからである。人間の個性を大切に、とか、弱者もともに生きる、ということは、人間もまた自然の一部である限り、^①地球的な豊かさからみれば当然のことなのである。

木の葉が落ちてバクテリアに分解され、土壌を豊かにするように、小鳥が木の実を食べたり、土中に蓄えたりすることによって、結果的に植林しているように、多くの種は、依存しあいながら生きている。人間もまた、相互に依存しあい、レンタイしあいながら、社会の中に根を下ろし、労働や対人関係や自然との交流の中から、養分を吸収し、自分自身も社会にいくばくかのものを還元して、植物のように生の循環をくり返す。その循環の環は、いくつもの他者の循環の環とからみ合いレンタイしあうことによって、豊かなのである。

企業のハグルマのひとつになりきって、全人生を会社に捧げたり、家に帰りついたら、寝るだけでは、自分自身の全体としての人生はない。カネというひとつの価値だけに支配されることも豊かではない。

もともと、生きる、とは生命力の全体的なハツキであり、偏った部分的な人生は豊かな人生とはいえないのである。私たちは食物、暖かさ、眠り、愛し愛されること、社会からはじき出されないこと、教育、信念、文化的活動、政治参加などのすべてに対する欲求を持つ者として、全体として生きるのである。それが自己実現である。

また私たちは、雄大な山を見たり、森の中を歩いたり、太陽の輝きが雨上りの樹々にきらめくのを見たりしたとき、^②一本の草や花、風のそよぎ、水の音、虫や鳥に出会ったときにも、心をひかれ、美しさや感動を覚えて立ちどまることがある。自然の中にいると、何ともいえない気持ちになり、永遠の自然や、命のふしぎさに、神秘的な何かをかんじたりもする。人生の挫折の中で、自然にふれて立ち直るきっかけをつかんだりするのも、人間そのものが自然的存在であるからだろう。

私たちは、近代文明にまきこまれないで自然を友として生きている民族に豊かさや羨望をかんじたりもする。それは、私たちの中にある自然と、外界の自然が、お互いに交流し、呼び合うからだろう。

比喩的な表現であるが、人間は、外の自然と共通で、外の自然と交流しあう、情緒的で、感覚的な、あるいは食欲や性欲という生命力の表現をはじめとする身体的な、いわゆる「^④第一の自然」とよばれるものと、科学、技術、生産などにかかわる「^⑤第二の自然」とよばれる二つの自然を持っており、その交錯、調和、統一によって生きている。

だから、人間が、自分を全体として生きていることは、第一の自然と、第二の自然を統一して、他者との共存の中で生きていることを意味しており、それが豊かさ感、という充実した幸せ感をもたらすのだと考えられる。^⑥経済価値にのみつつ走ることは、人間の二つの自然の調和にそぐわないことではないだろうか。

日本には、アメニティという言葉の正確な訳語がないといわれるが、アメニティとは、あるべきところに、あるべきものがある、ということだという。つまり、それは、^⑦第一の自然と第二の自然が、統一され、敵対的でなく、共存をひろげていくことを意味する言葉であろう。^⑧日本では、技術や生産力の価値があまりに支配的になってしまっているため、「あるべきもの」も「あるべきところ」も、わからなくなっているのであらう。

二つの自然の統一、調和というとき、^⑨注意しておかなければならないことがある。科学とか、技術とか、生産などの、いわゆる第二の自然にかかわる言語表現は、数字や法則を含めて、多様で正確な表現形式を持っていると思われる。金銭については最も簡明である。ところが、あの山はすばらしい、とか、この絵や音楽はいい、という感覚的な、第一の自然にかんしては、私たちは、ほとんど数字や法則のような客観的な表現を持っていない。「悲しい」という一言の背後には、おそらくいろいろなものがあるのだが、悲しみが深くなればなるほど、それは「悲しい」としか言いようがなく、人びとは、それを、体験的に悟るか、あるいは感覚的身体的なものによって、相互に了解しあうことができるにすぎない。

私がここで問題にしたいのは、人間というものは(あるいは自然というものは)、まだ知られていない多くのものを持っている未知の存在で、ただモノとカネがあれば幸せだ、ときめつけられるほどタンジュンなものではない、ということである。^⑩Z、豊かな社会の実現は、モノの方から決められるのではなく、人間の方から決められなければならないということである。

客観的な表現はできないけれども、この第一の自然、感覚や感情や身体という、私たちの生を支えているものにも正当な座席を与えなければ、本当の豊かさ感を得られないのではないだろうか。

注1 豊饒……土地が肥えていて作物がよく実ること。また、そのさま。

注2 羨望……うらやましく思うこと。

問1 線部アの漢字の読みをそれぞれ答えなさい。

問2 線部あのカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問3 次の文はもとも本文にあったものであるが、どこに入れたらよいか。直前の五字をぬき出して答えなさい。

感覚や感情を正確に客観的に表現するのが難しいだけでなく、人間には無意識の領域さえあるのだという。

(暉峻淑子著『豊かさとは何か』より)

- 問4 — 線部①「地球的な豊かさからみれば当然のこと」の理由として最も適当な一文を本文中からぬき出し、始めの五字を答えなさい。
- 問5 — 線部②「全体として生きる」とはどういうことか。最も適当な部分を「〜こと」につながるように本文中から三十字以内で書きぬきなさい。
- 問6 — 線部③「心をひかれ、美しさや感動を覚えて立ちどまることがある」とあるが、その理由を説明した以下の文の空らんA〜Dに当てはまることばを、本文中からそれぞれ指定された字数で書きぬきなさい。

人間そのものが **A** (五字) であり、我々の中にある **B** (二字) と、 **C** (二字) の自然が、お互いに **D** (二字) し、呼び合うから。

- 問7 — 線部④『第一の自然』とよばれるもの』とはどういうものか。ふさわしくないものを次のA〜Eから選び、記号で答えなさい。

A 情緒的で感覚的なもの I 数字や法則のような客観的な表現
ウ 感覚や感情や身体 エ 食欲や性欲という生命力の表現

- 問8 — 線部⑦と — 線部⑨「それ」の指している内容をそれぞれ五字以内で本文中から書きぬきなさい。

- 問9 — 線部⑤「経済価値にのみつつ走ること」とほぼ同じ内容を指している部分を本文中から二〇字程度で書きぬきなさい。

- 問10 — 線部⑥「アメニティという言葉の正確な訳語がない」理由を説明している部分を本文中から三十五字以内で書きぬきなさい。

- 問11 次の文は、 — 線部⑧「注意しておかなければならないこと」について説明した文である。空欄A〜Eに適当な語句をそれぞれ指定の字数にしたがって、文中より抜き出して答えなさい。

科学・技術・ **A** (二字) といった **B** (五字) は、多様で正確な **C** (四字) を持っているが、感覚的な **D** (五字) は、 **E** (三字) な表現を持っていないということ。

- 問12 空欄 **X** 〽 **Z** にあてはまることばとして最も適当なものを次のA〜Eからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A しかし I つまり ウ さらに エ また オ そして カ いわば

- 問13 波線部A〜オの「ない」について、一つだけ使い方の異なるものを選び記号で答えなさい。

- 問14 — 線部A「いくばくか」・B「そぐわない」の意味として最も適当なものを次のA〜Eからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア 少しばかり I 大変多く ウ どれほど エ かなり
B ア 抵抗しない イ 支障がない ウ 一致しない エ ふさわしくない

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

すわ、南海トラフ地震かと驚いた人もいたようだ。早朝の兵庫県・淡路島を震度6弱の揺れが襲った。季節は違うが、あの阪神・淡路大震災と発生時間とはごく近い。眠りから手荒く起こされ、18年前の記憶にふるえた方も多かったに違いない。

近畿から四国まで大きく揺れた。天災は忘れたころにやってくる、と言うけれど、このところは忘れるいとまもない。日本列島は地震活動期に入っているらしい。「常在戦場」の心構えを、日々新たにすることが欠かせない。

備えあれば憂いなし、とも言いが、これも言葉と現実が違う。実際には、備えあれど憂いあり、となろう。いまや「絶対安全」の大鼓判は何の保証にもならない。そんな中で、「想定外」の言い訳を封印すべく、いつか来る巨大地震に備えることになる。

今日かも知れず、遠い先かも知れない。備えとはゴールの見えぬマラソンに似ている。大災害が起きると個々の防災意識はいつとき高まる。しかし、いつしか走るのをやめてしまう人も少なくはない。

亀をめぐる笑い話を前にも書いた。夜店で「万年生きる」と言われて買うと、すぐに死んでしまった。文句をつけると「今日でちょうど万年目だった」。地震の確率と思って聞けば、笑話ではなくなる。

科学は進んでも、人間が地球にあてる聴診器は頼りなく、地震の予知は「見果てぬ夢」らしい。ゆえに「不意の地震に不断の用意」という関東大震災後の標語は、地震から90年がたつ今も色あせない。肝に銘じたい。

(朝日新聞『天声人語』《二〇一三年四月一四日》より)

- 問 次の文章は右の文章を要約したものです。 **A** 〽 **オ** に当てはまることばを本文中からそれぞれ指定された字数で書きぬきなさい。

淡路島で震度6弱の地震が **A** (二字) した。近年日本では地震が頻発しており、巨大地震の **イ** (三字) の被害に備える必要がある。 **ウ** (二字) 意識の一时的な高まりはすぐ冷めてしまうことが多く、地震 **エ** (二字) の困難な現在、 **オ** (二字) の用意が必要だ。

